

第7回 産地形成をいかに進めるか

P - six の左辺を考える

2007年7月17日

P - six の左辺は主体的条件について表現したものであるが、これについて以下考察を加えてみよう。

P r o m o t i o n やる気を起こさせる

前回述べたような観点から販売戦略の開発に取り組むうえで、生産者、組合員にいかにやる気を起こさせるか、ということが、何よりも重要な課題になる。

やる気を起こさせるためには、消費者や実需者に産地としてどう取り組んでいるかということをPRすることが先ず重要である。

どのような生産方法、栽培方法や技術でもって、安全、安心な多様な農畜産物を生産しているか、あるいはまた環境保全や資源の保全・管理、さらには景観の創造に取り組んでいるか、あるいはいかに都市・農村交流に取り組んでいるかなど、外部の消費者や実需者に対する情報発信や多面的な広報の努力は欠かすことができない。

さらに全力をあげて取り組んでもらいたい課題は、2006年4月に新たに制定された、地域を代表するブランドの新しい登録制度「地域団体商標」である。地域産業の振興やニセブランドの排除、地域農産物の競争力向上などに欠かせない。地域ブランドとは地域の名称と商品（またはサービス）を組み合わせた商標であり、商標を取得できるのは、農協や漁協など法律にもとづいて設立された団体に限られ、団体が産地であることを保証することになり消費者のためにもなるものである。

そこで、重要となることは、地域の消費者はもちろん生産者に至るまで、いかなる新たな体制で地域の農業をはじめとする地域振興に取り組むべきか、そのためにやる気を起こさせるための路線の策定や情報発信を行わなければならない。

具体的には、地産地消をねらいとした直売所の立ち上げや学校給食などを通じた食農教育の推進、地域の病院や養護施設などへの農畜産物供給システムの確立などである。要するに多面的な分野へのPR活動を通して産地としてやる気

をいかに起こさせるかという推進活動が重要である。

Positioning 立地を生かす

立地を生かし誇れる産地を作るということである。わが国のどこの農村も、またJA管内も、それぞれに特有の立地特性に恵まれている。大きくは北海道から沖縄、南西諸島に至るまで、さらには平坦水田地帯から山間棚田地帯に至るまで、多様な立地条件に富んでいる。前述の「地域ブランド」を、これほど作りやすい国はないのではないかと思うほどである。これらの立地条件をいかに生かし、多様な個性に富んだ農畜産物の生産と販売をいかに行うか。そのことが、いま、ますます問われているだけでなく、これからの時代にますます生かしていかなければならないと考える。

例えば、水田農業ビジョンの策定にあたって、もっぱら米や麦や大豆にばかり関心を払うのではなく、米よりもはるかにもうかる作物はそれぞれの地域で数多く存在することに目をつけるべきである。さらに加工などを加えればさらにもうかる作物は各地域にいくらかでもある。中山間地域にあっても、その条件不利を嘆くのではなく、標高差を生かして多種多様な野菜やきのこの周年供給体制を作り上げている地域やJAもある。「立地を生かし誇れる産地を作ろう」ということを合言葉に活路を見出してもらいたい。

Personality 人材を増やし生かす

人材を増やし、マネジャー、リーダーを生かすということである。

地域の農業生産者にいかに人材を増やすか、またJAの役員、職員にいかに人材をふやすか、ということが、地域農業活性化の基本課題である。人材とは何か。企画力、情報力、技術力、管理能力、組織力という5つの基本的要素の総合力を身につけているのが人材であると私は考えているが、ここではその詳細にはふれない（JA総合研究所『JA総研レポート』創刊号、「共生の時代とJA」2007年4月、P2-3参照）。

また、人材を増やすという課題は、ともすれば男性のそれも中堅や青年に眼が行きそうであるが、女性や高齢者も重要である。私がかねてより「高齢者」と言わずに「高齢技能者」と呼んできた。生まれてから高齢の現在に至るまで、

さまざまな知恵や技能、技術を五体に刻み込んできているからである。女性がリードし高齢技能者を生かしている地域は農業にしても直売所にしても活気に満ちあふれ医療費負担の少ない町になっている。私の説く「ピンピンコロリ路線」を実現してもらいたいと考えている。

小括 P - s i x の 6 角形の採点を

以上述べてきた P - s i x 理論の 6 角形の図を前にして、それぞれの地域、なかんずく J A の達成点は何点であるか、各 J A の関係者それぞれの頂点を 10 点満点として、何点を実現しているか、各部門の担当者の立場から採点してもらいたい。8 点以上であるならば合格点、つまりかなり大きな成果をあげていることになるが、8 点以下ならば、どの分野をさらに改革、改善していかなければならないか、その改善への努力と方向性が明らかになると思う。もちろん、各部門の担当者個人の立場で採点し、それを持ち寄り、それぞれの担当部署で総括的な評価を行い、新路線の方向性を明確にして、各頂点が 10 点満点になることを目指して頑張ってもらいたい。それが J A 改革、とりわけ営農企画、販売事業の改善につながり、地域農業の振興にもつながっていくものと確信する。ぜひとも、全力をあげて取り組んでもらいたい。